

第十八回和辻哲郎文化賞 学術部門 受賞作

佐藤 康邦 著『カント『判断力批判』と現代

—目的論の新たな可能性を求めて—

(2005年2月25日 岩波書店 刊)

佐藤 康邦 さとう やすくに 昭和19年(1944)生まれ。東京都出身。専攻は、哲学、倫理学。東京大学文学部倫理学科卒業。同大学大学院人文科学研究科博士課程修了。博士(文学)。アレクサンダー・フォン・フンボルト財団奨学生としてドイツに留学。東京大学大学院人文社会系研究科、文学部(倫理学)教授(受賞時)。現在は、放送大学教養学部教授。著作は、『ヘーゲルと目的論』、『絵画空間の哲学—思想史のなかの遠近法—』、『現代を生きる哲学』、『哲学への誘い』、編著に、『システムと共同性—新しい倫理の問題圏—』、『モラルアポリア—道德のディレンマ—』、『甦る和辻哲郎—人文科学の再生に向けて—』、『感覚—世界の境界線—』、『風景の哲学』、『カント哲学のアクチュアリティ—哲学の原点を求めて—』、他がある。

受賞のことば

この度は姫路市から権威ある和辻哲郎文化賞を頂くことになり、誠に光栄なことと思います。私にとってこの受賞は、次にあげる二つの理由でことにうれしく思われます。まず第一には、この著書は、狭い意味でのカント研究というより、私の長年にわたっての研究テーマである目的論を通しての哲学的生命論の展開ということを中心としたものであり、その点では私のこれまでの研究全体が評価されたような気がするということがあります。第二には、カントやヘーゲル等の古典的哲学の研究を通して自らの新たな哲学的表現を追求するという事は、和辻哲郎を始めとする近代日本の哲学者達の基本的研究姿勢であったのですが、私の今回の著書も、何とかその伝統を受け継ぎながら、同時に先人達の思索の価値を明らかにするという側面も持つものであり、この受賞がその意義を改めて評価してくれているようで、私個人の立場を離れて純学問的意味でもうれしいのであります。

《選考委員評》

坂部 恵

『純粹理性批判』、『実践理性批判』に続くカントの第三番目の「批判書」、『判断力批判』は、先行する二著を承けて、理論哲学と実践哲学を架橋し、批判哲学全体を締め括る位置を占める。その前半部分「美的(直観的)判断力の批判」は、ゲーテやシラーに靈感を与え、ロマン派の哲学者シェリングの「叡知的直観」の所説を触発した。また、後半部分の「目的論的判断力の批判」は、機械論的自然観全盛の時代にあって、有機体論的・生命論的な自然観に一定の位置づけを与え、ロマン派の自然哲学・自然観への道を拓いたものとして、近年の思想史研究でも見直しの機運が進行しつつある。とはいえ、カントが六十代のなかばに達して、かならずしも十全な体系的構想を成熟させることなくいささか性急に仕上げた観のある『判断力批判』は、前半部分と後半部分の統一がかならずしも明瞭とはいえ、これまですくなくからぬ研究者を悩ませ、その他の多くの研究者は、この書を読みはしても、研究対象としては敬して遠ざけ、他の二つの批判書を主たる研究対象とする傾向を生んできた。

佐藤氏の今回の御著書は、『カント『判断力批判』と現代—目的論の新たな可能性を求めて—』と題されているとおり、とりわけ現代の生命科学の現状を視野に置きながら、『判断力批判』の後半「目的論的判断力の批判」のあらたな読解の可能性に挑戦し、またその視点から同書全体の統一的・総合的な把握を示したものである。一方で、素朴な機械論的DNA決定論に惹かれるひとびとが多く、他方で、これまた素朴きわまる有機体論的「国家」・「伝統」観がひとびとの心を捉える現状は、(司馬遼太郎好みの表現でいえば)この国の行く手を危うくしかねない。けだし、警世の一書というべきだろう。

関根 清三

今年度の受賞者・佐藤康邦氏は、半世紀前に和辻哲郎の奉職した、東京大学文学部倫理学研究室の教授として、和辻の学統を現代に受け継ぐ碩学である。ドイツ観念論を中心とした倫理想研究を遂行しつつ、他方、現代における科学論の展開も論じ、更には和辻研究や絵画論も物し、その研究領域は多岐にわたっている。中でも処女作『ヘーゲルと目的論』以来その中核となるのは、目的論の持つ、有機的生命や美についての理論という性格への着目、それと連動して形態、構造、偶然性、システムといった近代の科学的合理性に対抗する諸概念を、批判的に吟味しようとする問題意識であった。受賞作はこの系譜の研究の集大成であり、カントの『判断力批判』の読解を基礎にすえつつ、目的論の現代的な意義と可能性を探求した労作である。

一方で本書は、目的概念に直接関わる「美的判断力」及び「目的論的判断力」という二種類の「反省的判断力」、ならびに「構想力」という、錯綜する主要諸概念を、『純粹理性批判』『実践理性批判』という先行する二つの批判書以来カントの提示する、これまた錯綜した体系論のうち明晰に位置づけ、読み解いて行く（第二・三章）。そして「世界の究極目的」を「道徳的主体としての人間」とし、また、「最終目的」を「幸福」と「文化」とする、カントの「究極・最終目的」論を批判的に吟味する（第九章）。他方、佐藤氏はカントの「美的判断力」を、今日の科学的形態論、構造生物学、J. J. ギブソンの「アフォーダンス」論等の認知科学、ルネ・トムの数学論等を視野に入れて解き明かし（第四章）、またカントの有機体論を、現代のオートポイエーシス論等との関連で論じ（第六章）、更にはカントの「神の知性」論とそれに対するヘーゲルの批判という哲学論争の先に、脳生理学や認知心理学のような現代経験科学との関連性を見て取るのである（第七章）。こうしてカントの名著の歴史的な意義と問題点、そしてその現代に開かれた可能性が、視野の広い均衡の取れた考察の中で次々と明らかにされて行く。

本年度の受賞作として、このような博学な著者の多年の思索と探求の成果を得たことを、多くの読者と共に心から慶びたい。

黒住 真

今回、選考の過程でいくつもの優れた学術書に出会うことが出来たことは、大きな喜びであった。

和辻哲郎の「学術における問い」とはどんなものだったのか。彼は、学の対象を、西洋に限らず東洋・日本にも広げ、自身の時期のみならず近代以前にまで踏み込んだ。またそこで、ただ史実や論理を追うに留まらず、ひとが生きる倫理・哲学や芸術・宗教についての問いを立てている。こうした和辻の問題意識を一その扱う主題は様々ではあるが一回読ませていただいた各書も、意識無意識に大きく担っていると感じた。それは驚きであると共に、今の学術の方向を提示するようでもあった。

佐藤康邦氏の受賞作は、カントへの深く個別的な研究書である。しかし、そこで問われている問題は幅広くまた大きく、読者の心をつよく動かす。近代の主体を論理的に位置づけたカントが、じつはそれだけではなく、生命やその生きる目的との関連を問題化していること、そしてそれが現代的な意義をもっていることが判ってくる。本書のタイトルに「現代」と「新たな可能性を求めて」とある意味がそこにある。これは、いわゆる物理主義では済まない生命との出会いが立ち現われてきた、二十世紀末以後の私たちに大きな示唆を与え、また和辻の「問い」に対して間接的であれ深く答えるものでもある。

佐藤氏がそこに捉えているものは、たんに存在論ではなく目的論である。そしてカントが、天地自然とひととの関係に踏み込み、それをめぐるひとの働きを、楽観主義でも悲観主義でもなく、感性・道徳をめぐって見出そうとしているその実際が明らかになる。これも、従来の狭い哲学論・倫理論では見えなかったものにつながる。その在り方は、例えば、仏儒道教などの東洋思想・宗教の諸概念に関連・対比する面さえあるようである。このようなことは本書が述べているわけではない。しかし東洋日本思想を学ぶ私にとって、大きく刺戟的な示唆となった。本書はカントを深く論じながら、じつは東西思想、二十一世紀思想文化に関わる「道」を示すものともなっている。本書が示し与えてくれたものを心から喜びとしたい。